

くるまのまどにうつる梅

「へえ」

学校もお休みの、日曜日のお昼まえ。いつものようにタコカフェの車の中でお皿を洗ってた私の耳に、あかねさんの声が聞こえてきた。

「? どうかしたんですか、あかねさん?」

顔を上げたら、車の窓から外を眺めてたあかねさんが、顔半分と目だけこつち向いて、

「いや。ただ、梅の花がきれいだなって思っただけだよ」

「梅の花?」

私の位置だと、見えないけど、そう思ってたら脇からひよい、っと手が出てきて、体がちよつとだけ持ち上がった。

窓の向こうに、細い枝と白い花。

「きのうは、なかったですよ?」

「ああ。何年もここに店出してるけど、梅を見るなんて初めてだねえ」

床に降りてもらってから、私はつま先立ちでもう一度みてみた。白くて小さい、きれいな花だけだなにか、へん?

「ずっと咲いてなかったのかしら」

「梅は、咲くまでに結構かかるからね。」

ええと、桃栗3年の梅はすすいすい13年、だっ
たかな?」

あかねさんは、なにも感じてないみたい。私の勘違い、かな。

「10年以上もかけて咲いたんですね」

「なに言ってるんだい。あんただってそれ以上かけて、やっといま咲いてンでしょ? 同じよ、同じ」

わしゃわしゃ、って頭なでられながら、私はまだちよつと、へんな感じがしていた。

3 くるまのまどにうつる梅

ひかり引き寄せて、頭わしゃわしゃ、か。あいか
わらずラブラブしてるなあ、あのふたり。

公園のすみ、ベンチの影からのぞいててもわかる
くらいだもんねえ。まあ、もうみんな慣れちゃって、
あのラブラブつぶりで癒されに来るお客さんまでい
るらしいけどさ。

に、しても。

「だから、ひと驚かすときはあたしからにしる、つ
て何度も言ってるでしょうが、ほのか!」

あたしがとなり向いて言ったら、同じベンチの影
でしゃがんでるほのかが頭あげた。

「だ、だあってえ、なぎささあ」

「だつてじゃない!」

いいわけ最後までなんて、聞いたげないよ、まっ
たく。わざわざタコカフェの車の前の木に、梅の造
花つけたりしてさ。

「どーすんのよ、あれ。ひかり、本当に信じちゃっ
てるよ?」

あたしは知ってただからね、あのガチガチに硬い
梅の花に仕込んだクラッカーで、パンと弾いて驚か
そうとしてんの。疑^{うたが}ってもない子にそんなこと
ん?

「まあ、いいんじゃない? あれはあれで」

ほのかが指さした先で、またひかりが抱っこされ
てる。まったく、あかね先輩は 一瞬、放つとい
てもいいかも、なんて思っちゃったじゃないの!

でも、なにふたりで喜んで ああ、あれかあ。

「へえ、さつすがほのか。凝^こってるね。つぼみが勝
手に花開くなんて ほのか?」

「あ、ありえなうい」

なに、びっくりした顔してるのよ。あたしの口ぐ
せなんかまねちゃって、まっすぐ指差して。

なんだろ? そう思ってその先を見て。そのまま、
あたしは口が閉じなくなった。

風に吹かれてひらひら落ちてゆく梅の花　　って、

「ちよ　　とと、まってる。あれ　　」

あたしが横向いたすぐ前で、ほのかのびっくりした目と目が合った。

「ほ、本物おっ!?」

『ほ、本物おっ!?』

大きなふたつの声と一緒に、近くのベンチから影がふたつ飛び出してきて。

「ふふっ」

思わず私、顔がにこにこしちゃった。

「なーにやってんだろねえ」

となりのあかねさんも、やれやれって顔でベンチを見てる。ふふふ。

「高校に行つて、パワーアップしましたよね、ふたりとも。なんだか、わたしたちを驚かそうとしてた

みたいですけど」

そう、なんとなくヘンだな、ほのかさんかな、って思ったのよ。だからちよっと　　ほんのちよっと使つてみたの。まだちよっとだけ使える、わたしのちから。

「ま、バカはやれるうちにやつたほうがいいんだけどね」

バカ、か。

ダメだなって思つても、つい顔が下向いちゃう。ほんととはあまり、ひとと違っちゃいけないんだもの。私は

「バカは、あんたもだよ、それっ」

え？　あいた！

いきなり痛みが走つた頭を上げたら、軽く曲げたあかねさんの指がそこにあった。

「あなたになにができたって、あたしはもつ気しないんだから。やるときはちゃんと言いなさい、って♡」

にやつ、て感じて笑ったと思ったら、あかねさんがいきなりエプロンはずして、シヨルターバックつけたわ。

「さつてとあ。いたずら娘もおとなしくなつたし、それじゃひかり。しばらくお店お願いね」

「あれ？どこへ？」

「ふぶん、デート、かな？」

私、しばらくびつくりした顔してたみたい。そのあと来たなぎささんたちに心配されたくらいに。

あかいはかまにしるい梅

「咲い、手があいたらこつちもお願いな」

日曜のお昼どき。あつたかい陽気に誘われて、パンパカパンは今日もいっぱい。

商売繁盛はいけれど、今日はちょっと多すぎ。お父さんがパン焼き釜の前でてんでこ舞いしてるし、咲にレジ代わってもらわないと、と思ったんだけど。テラスの向こうを見てみたら、咲がぺこぺこ謝ってるみたいね。なにかあったのかし。ああ。

「なに、お母さん？」

ちよつと、素直に育てすぎちゃったかしらねえ。友達置いてまで、エプロンはためかせて走ってこなくてもいいのに。

それにしても、あのお友達、

「今日は、いつもと違う服なのね？」

「え？ああ、そうそう！満と薫の服ね。仮縫い

だったのが縫いあがったから、見て欲しいって来たんだよ」

うれしそうに言うわねえ。ほんとに。

「あれは 巫女さん？」

「そう、おおぞらの木の巫女さん！」

私が二人をみたら、ぺこつとお辞儀してくれたわへえ。

そういえば言ってたわね。あのほこらに、巫女さんが来たって。あの子たちだったの。

いままで考えてもみなかったわ。ちゃんと社務所まであるんだから、居てもおかしくないのにね。

あら、社務所って、昔からあったかしら？

「わたしも、お手伝いしますね」

ちょっと頭をひねってたら、声が近づいて来たわ。

「あれ、舞。来てたんだ」

「ひっどいわね」

咲のお友達の、舞ちゃんね。この子はいつもと同

じ、シャツにパンツ姿。口ふくらませながら、でもエプロンと三角巾をぱつと掴んで2秒で準備しちゃうんだもの、慣れたものだわ。

「まあまあ。あたし、お客さんの説明に行くから、舞はレジ頼める？」

「おっけ。それじゃ、おばさまは作る方のお仕事、お願いします」

はいはい。それじゃ、古いのはお父さんのほうに行きますか。

でも、ちょっと気になるわね、あの巫女服の子達。目。なんだかまるで

お母さんと交代してしばらくたってても、お客さんが途切れないんだもん。ちょっとレジでひとやすみと。

「それにしても、すっごい人だなあ。なんかあったっけ、今日？」

7 あかいはかまにしろい梅

「梅がたくさん咲いたんですって、おおぞらの木の近くで。それで、お花見する人がお昼ご飯を買いに来てるのよ」

よっかかってたレジでキー打ちながら、舞が言ったの聞いて、あたしは思わず顔みちゃったよ。

「へ？ あそこに梅の木なんてあったっけ??」

「やっぱり、咲も知らないんだ。あのね」

舞が口元をあたしの耳に寄せてきた。いいけど、ちよつとくすぐつたいな。

「おおぞらの木の近く、なんだか植物がいろいろ育ってるみたい。きつと」

「店員さん?」

はっとしてお店の方見たら、レジ前で何人かならんてる。ヤバっ！

「す、すみませーん。すぐレジしますからね、ね」
舞に代わってレジ慣れてるあたしが打ち始めると、少しづつ待ってる人が減っていった。

けど、あたしの頭の中は、さっきの舞の言葉でいっぱい。

植物がいろいろ育ってるみたい、か きつと、あのふたりが住みついたからだよね。

「ふたりとも、人気あるからなあ」

思わず口に出しちゃって、はっとした。いけないいけない。気をつけないと。

なんたって、満たちが人気な相手は、精霊たちなんだから。

「それにしても」

こないだは、ほころの前にいきなりふたりの住む家が建つちゃうし、今度は梅の花いっぱいなあ。ちよつと不思議な雰囲気なのは、巫女さん、ってことで、まかしてるけど、

「いつまでもつかなあ」

「咲らしくもないわね。もたせるのよ、決まってるでしょ?」

いつの間にか隣でパンを包んでいた舞がそう言っ

た。小さくて、でもしっかりした声で。

「強くなったね、舞」

「冗談でしょ」

ありがとございしました、ってお客さんにおじぎした舞が、起き上がりながらぺろっと舌だして言った。

「咲がいなかったら、とつくにべっしゅんこよ」

そうだね。

あたしたちの、友だちだもん。ちゃんと守らなくちゃ。

「それじゃ、行ってくるわね」

焼き釜の前で手を上げるお父さんにならずいてから、私はお店に向かった。

咲に声かけて、おでかけ と思っただけだ。

「はい、次のお客さん、どうぞー」

「えーと、これで全部 え？ ひとつ入れ忘れ??」

「ごめんなさいっ!!」

あらあら、まだお客さん続いてたのね。

困ったわね、さすがにこれじゃ店を空けるわけに

あ、そうだ。

「あ、お母さん、ちよっと助け って、その格好、

お出かけ?」

レジの後ろを通り過ぎて、店の脇から窓開けて、と。

「え？ お母さん、なにしてん」

すうっと息すつてから、私はできるだけ明るく声

出した。

「満さん、薫さん。悪いけど、お店手伝ってくれな

い?」

言い終わる前に、二人ともすぐに立ち上がったっつ

ちへ来るわ。ああ、やつぱり。

「ちよっと、お母さんー」

エプロンふたつ持ってお店を出た。咲がついてき

てるけど気にしないで、やってきた二人にエプロン

差し出したら、二人ともぱっと受け取って巫女さん

の服の上につけたわ。何のためらいもなく、ね。うんうん♡

「はい、じゃよろしく。咲は、ちょっとこっち来なさい」

満さんたちがお店に入っていくのを見ながら、私は咲に顔近づけた。

「さーき、お友達でしょ？ 差をつけないの」

「え？」

びっくり顔なんかして、もう、わかってないんだから。

「舞ちゃんに働かせといて、満さんたちはお客様扱い？ そっちのほうか、よっぽどひどいわよ」

「でも、あの格好でお手伝いなんかさせたら、ヨ

コレ」

言いかけた咲の口を、私は指でつまんでふさいだ。

「ちゃんとあの子達の目を見た？ 二人とも、咲がはじめてお手伝いしようとしたときと同じ目よ。

咲の力になりたくてしょうがないの。わかる？」

咲の顔をお店の方に向けたら ほおら、レジのところからガラス越しに三人。舞ちゃんまで、心配そうにこっちを見てるじゃない。

「じゃ、あとよろしくね。用事が終わったら、お土産持って帰るから」

私はそう言い捨てて、お店を離れた。

きつと、照れくさそうな顔でお店に入ってくんだろうなあ、咲は。もう、振り返って確認なんてしないけど。

「だいじな子なら、ちゃんとだいじにしないさい。変に特別扱いしないで、ね」

おひるごはんに梅のはな

「学校は休みだったのに、結構混むもんだねえ」

日曜のお昼。購買の窓から顔出して、テラスの方を覗いてたら、あたしは思わずこぼしちまったよ。

まあ、部活動推奨の聖ルミエール学園理事長としちゃあ、部活で来るのはうれしいことだけど。関係ない子が休みもごろごろ居るってのはどうなんだろうねえ。それだけ学園を愛してくれてる、ってんならいいことなんだけど

ああ、あの子たちもだね。今日は図書館も閉まっているし、フットサル部の活動があるとも聞いてないし。なにしてんだらうね？ っと、そつだ。

「シロタ。お友達が来てるよ。行かなくていいのかい？」

さっきまで皿を運んでくれたシロタに声かけたら、はあ、ってひとつためいきついたよ。そついや、

さっきから運んだらすぐ戻ってきてたっけ、なんだい？

「食つてるときのあいちらには、近寄りたくないっすよ」

ははあ

「女の子がバクバク食べてる、ってのは、ちょっとゲンメツかねえ」

このくらいの歳だと、男の子は夢もってるからねえ。女子校は色々つらいかもね。

「そんなんじゃないです。でも」

ちらっとテラスの方を見てから、シロタがうんざりした目で振り向いたよ。

「あれは、そんなレベルじゃないっす」

まあまあ。そんな、ためいきと一緒に、吐き出すみたいに言わなくても。

どれどれ、なにがそんなに あ。

「ああ、うちらちゃんね」

さっきたくさん注文が入ったから、てっきり運動

部の子が多いんだと思ってたんだけど。結構な数の
お皿が、あのテーブルに集まってるね。まあ、わか
ないわけじゃないけどさ。

「元気に食べるのはいい子の証拠！シロタも、ちゃ
んと食べるんだよ」

ぼんつ、と背中ひとつ軽く叩いたら、シロタがゲ
ホゲホ咳き込んだ。あれあれ。

こりゃバイト料のホットケーキ食べ放題も考えた
ほうがいいかねえ。にんじん入りとかピーマン入り
とか

「手のかかる子供だねえ、まつたく♡」

あー、痛え。

店長、勢いつけて叩くんだもんなア。悪気ないの
はわかるから怒れないけど 背中は大変なんだぞ
鳥には。

まあ、注文もひと段落したみたいだし、皿洗いでも
しながら少し休むか。あいつらがにつかまると、休む
こともできねえからな。できるだけ、中に隠れて

「おーい、シロップーっ！」

つていきなりなんだよ、おい！

窓から頭半分出してみたら ああ、やっぱりだ。

「おーい、シロップ もがぐあ!!」

髪の毛ふたつしぱりにしたヤツ——のぞみがオレ
の名前をまた呼びかけたとたん、りんとつららが両
側から机につぶしてた。

「あつんの、バカー！」

思わず口から出ちまった。どつすんだよ、まわり
みんな注目してんじゃねえか。

「シ、シロ そう、ホットケーキのシロップがけ、
お願いしまーすっつ!!」

あーあ、くるみのゴマカシ方もわざとらしいし。な
にやってんだよ、あいつら ん？ 甘いにおいが
するぞ？

「ほら、シロタ。あがったよ」

「やっぱり、ホットケーキか。誰も食やしないってのになあ。」

「なにしてんだい？ お客さんのご指名だよ。ほら、行ってやんな」

「こっちはこっちで、へんな誤解してるし。だいたいいさ、」

「いつから指名ありになったんですか、ここは？」

「今から、かねえ。ほれ、サービスは日々改善していかないと」

「ホットケーキ突き出したまんま、満面の笑顔ってやつで言うんだもんなあ、やっぱ勝てねえや。」

「はあ わかりました。行きますよ」

「ホットケーキの皿受け取って、おぼんに乗せながら、オレは顔を作り直した。相手があいつらでも、仕事は仕事だからな。さて え？」

コトン

「小さい音といっしょに、おぼんの上のものが一つ増えた。小ビンに一本、花つきの枝。なんだ？」

「テーブルに置いてやっておくれ。一本だけだけどね」

「シロップ、あんた何もって来たの？」

「テーブルまでやってきたオレに、最初に声かけてきたのは、くるみだった。」

「店長が、持ってけてさ。おまえらに花なんか似合わないと思うけどな」

「テーブルの上、大量の皿を端によけてから、オレはおぼんの上の花をそおっと手に取った。誰あてってわけじゃないみたいだし、きちんと真ん中におかないとな。」

「まーた憎まれ口叩くう」

「うるせえなのぞみは、まったく よし、このへんで真ん中、だな。あ、こら。」

「梅の枝ね。九州には梅が枝餅えもちっていうお餅があるんだけど あ痛っ！」

横からこまちの手が出てきたんで、オレは軽く叩いてやった。

「ちよつと、なにすんのシロップ！」

かれんが反対側から口出してきた。友達なら手え出させるなよな。

「さわるんじゃねえよ。花が散るだろ せつかく咲いたつてのに、かわいそうじゃないか」

まったく、神経のない連中だよなあ。思わず、オレは目えつむつてためいきついちゃまった。

ん？ なんか、静かになつたぞ？

「へ〜〜〜え？」

うわっ！

目を開けたら、のぞみ。にやにやした目のアップに、思わず一歩さがちまったじゃねえか。

「シロップが花好き？ 意外ねえ」

「結構ロマンチストですよ、シロップ」

「お花の音が聞こえるのね。ごめんなさいね、シ

ロップ」

あーっ、もう好き勝手言いやがって、こいつらはああっ！！

「おまえら うぶっ！！」

口を大きく開けたとたん、いきなり甘い味が広がって、声が出なくなった。

「まあまあ、みんなその辺にしてやってよ。ほら、のぞみも離れなさいって」

口元に出てきた手は くるみか、こいつ！

「キュアローズガーデンで、花に囲まれて暮らしてたんだもの。そりゃ、花に思い入れも出てくるわよ。ねえ？」

ぐ、っ

「で？ オレになんか用か？」

「ごまかした？ とか言ってるじゃねえ、聞こえてんぞ。 まあ、いいけど。」

「あ、用？ 用なただけどねえ それっ！」

のぞみの声の調子に、なんかヤバい気がして逃げる準備してただけど、一步遅かった。

いきなり両腕が動かなくなつたと思つたら、

「聞いたわよ、シロップ。あんた、ここしばらくホットケーキしか食べてないっていうじゃない」

右の耳元からは、りんの声。こいつ、いつの間にも後ろ回りこんだんだ？

「ちなみに、しらばつくれてもダメですからね。かれん！」

左の耳元から、くるみの声。ふたりして腕いつぱんづつ挿んで動けないようにしやがつて。

頭上げたら、かれんの腕。その先に、手紙がぶらさがつてた。『ちゃんと食べさせてやつてくれ』ってメルボまでかよ！

「ええと 大丈夫だよ、シロップ。一応、ひまわりとか粟玉とかはやめてもらつたから。小松菜なら人間でも食べられるよね？」

かれんの後ろから聞こえてきたうづらの言葉に、

オレはがっくりした。こいつら、ひとを いや、オレをなんだと思つてやがるんだ!?

「食べないと、どうなるか」

のぞみが、テーブルの真ん中に手を出した。つて、なにやつてんだ？

「食べないと、この梅の花がどうなつても知らないよっ!!」

「ちよ、ちよと待てえっ！ そんなもんで、オレを脅す気が!？」

なに考えてんだ、のぞみのヤツ。花で人脅すなんて、聞いたこともねえぞ？

「そのとおり！ さあ、どつするの!？」

普通なら、こんなの脅しになんねえ。普通のヤツなら

奥歯がみながら、俺は正面ののぞみをにらんだ。そつ、普通なら脅しになるわけない。けど、相手の本物のバカなら ちっ！

「ちくしょお！ 食うから手えどけろ、のぞみ!!」

しょうがねえよなあ、相手がバカバカじゃなあ。だけど、

「伝説の戦士のやることかよ、これ」

「目的さえ正しければ、手段は正当化できるものよ。

ある程度は、ね♡」

タップに入った小松菜を渡しながら、こまちがし

れつと言いやがった。

ぜーったい、こいつら悪者むきだ。

小松菜のサラダを口に放り込んでくるうちらの手を見ながら、オレはあらためてそう思った。

「戻りましたあゝ はあ」

はじめてだよ、購買の入り口が安全地帯に見えたのなんて。うーっ、くちん中が草っぽい あれ？

「それにしても、弱ったねえ」

中に入ったら、店長が頭に手なんて当てて考え込んでる。なんたる。

「どうしたんすか、店長？」

オレが声かけたら、困った顔のままの店長が振り

向いた。

「いやね、今日はそんなに生徒さんが来ないと思っ

てたんで、人と会う約束しちまつたんだよ。もうそろそろなんだけどねえ」

「ああ、だったらおっぱいしますよ。ちょっと待ってて」

言いながら表に出ようとしたら、エプロンの紐で首が絞まった。ぐえ。

「いやいやいや、そんなことしちゃいけないよ。でもねえ あ、そうだ。シロタ、あんた料理作れな

いかい？」

首からエプロンの紐はずしながら、オレはいまの言葉、頭の中に流してみた。料理？

「厨房貸したげるし、材料は適当に使っていいから。

ね、どうだい？」

料理、か。材料使い切れば、見たことないくらい
デカイホットケーキも食えるよなあ

「後悔しないでくださいよ」

「なあに。シロタなら大丈夫。そんなじゃ、まかせた
よ♡」

片目つむって合図して、店長はそのまま裏口から
出て行った。

まったく、オレが変なことするなんて、疑いもし
ねえんだもんなあ よおし！

「おーい、くるみーりん！ ちょっと料理手伝って
くれーっ！ って、こら、のぞみー！ おまえは来
るんじゃないねえっ!! 購買が壊れんだろうが!?!」

ドーナツならに梅おいて

「ほお。うめかあ」

ほかほか陽気のお昼まえ。学校のない日のあたし
は、ミキさんとブッキーといつもどおりのテーブル
を囲んでただけ。

「ん？ かおるちゃん、なんか言ったー？」

いきなり車から身を乗り出して、なんか見てるみ
たい。なんだろ？

「ああ、いやあほら、梅が咲いてっからね、オレも
うめーもん作らないとって。ぐは」

あー、はいはい。かおるちゃんもあいかわらずだ
ね。変わらない、ように見えるんだけど。

「あつたかくなつたものねえ」

ミキたん、そう言いながら、手を目の上にやって
空を見上げてる。けどすぐ、なにか探してるみたい
な目になった。

そっか。あたしだけじゃないんだ。

「せつなちゃんたちがラビリンズに帰って、もう1ヶ月かあ。早いなあ」

ブッキーの言った言葉で、あたしたち3人が一緒にためいきついた。

そっなんだよね。頭ではわかってるんだけど、やっぱりまだ、ちょっとさびしいかな

「はい、特製ドーナツ。オレのおごりね」

って思ってたあたしの前に、おさらがひとつやってきた。4つのハートに、違う色のジャムが乗った、

「クローバー型のドーナツ？」

見上げた先で、かおるちゃんの口元が笑ってた。

「赤いのは、せつなちゃんのだよね」

「まーね。せつちゃん嬢ちゃんには特製作ってあげるって約束してたから、たまに作ってるの。でも結局、あげられてないねえ」

そう言うかおるちゃんの横から、ひよい、っと手が伸びてきた。

「——それじゃ、これ。いただきます」

赤いドーナツ手に取った、短い髪の女の子　　つて、え!?

「せ、せつな!?!」

赤いジャケットにパンツ姿。すぐ隠しちゃうきれいな笑顔。ほんと、本物の、せつなだ

「なによあ、忙しくてなかなか来れないとかいってたくせに。来るなら来るって言うてよね!」

来るのは月に一度くらいにしないと、帰りたくなくなっちゃうから　　なんて言うからガマンしてんのに、せつなったら、もう!—

「ゴメン。急に頼まれちゃったの」

って、急に?　なんだろう、またヘンなことでも

そう考えてたら、せつなの顔が横向いた。

「かおるちゃん。ドーナツ、あと10人前欲しいんですけど」

「んー?　ああ、兄弟のおつかい?」

兄弟?　あ、ウエスターか。かおるちゃんと息

が合っちゃって、自分もラビリンズでドーナツ屋やるって言ってたっけ。

「ええ。アカルン借りて、自分で来ようとまでするんだもの。しょうがない人よ」

そうは言ってるけど、苦笑いの顔が楽しそうだな、せつな。

「もつとみんなが染に来れるといいのに」

「それはいま、サウラーが研究してるわ。メビウス

——さまの塔に残った資料かき集めてね」

そつが、みんな頑張ってるんだ。言ってくれ

ないけど、多分せつなも、だよな。

「いまのウエスターの店も、それなりにお客さんできたんだけど、やっぱりこの店と違うの。だから」

「あー、そつかあ。それじゃ、売れないわ。悪いね」

「……ええっ!?!」

あたしたち4人の声が重なった。ど、どつして？

「ちよつと待ってて」

かおるちゃん、近くに咲いてた梅の下まで行って頭

下げてから、花のついた細い枝をひとつ折った。戻ってきたと思ったら、お皿の上に枝のせて、せつなに渡してるよ。

「これ 花?」

「そ、梅の花。兄弟に渡して、こつ言っただけよ。』これ見て、思ったのをドーナツにすりゃいいってね」

せつなが梅の枝もってテーブルの席について、何度も眺めてるけど へんだなあ、かおるちゃんが、こんなイジワル言っなんて。

「ちよつと、かおるちゃん?」

「ちよつと、かおるちゃん?」

あたし、かおるちゃんに近づいて訊いてみた。ブックーとミキたんも、後ろでにらんでる。けどかおるちゃん、顔近づけてきて、こつそり言ったわ。

「兄弟の味は、オレが決めちゃいけないの。げは」

振り向いて2人と目を合わせて、あたしたちみんなどうなずいた。イジワルじゃないってわかれば、それでいいから。

アカルンにお願いしてラビリンズに戻ったのは、その日の夕方。ほんとはもう少しいたかったんだけど、帰りたくなくなっちゃうし、ね。

塔の前にできた公園の隅、まるでラブたちの世界を写したように、ドーナツ屋の車がとまっている。わたしはその窓まで行って、中に向かって声をかけた。「ウエスター。ドーナツ、もらえなかったわ」
「え!? あ、そうか、お金か。しまったなあ、お金のことですっかり忘れて」

車の中、ボールの中の生地をかき混ぜてたウエスターが、ぱつと顔あげてそう言った。そうね、お金のことは、わたしも忘れてたけれど、

「ちがうわ。かあるちゃんが、ウエスターにはあげられない、って。その代わり、これ」

もらったときと同じように、お皿に花つきの枝を乗せて、わたしはまっすぐ差し出した。

「言ってた通りに伝えるわよ、『これ見て、思ったのをドーナツにすりゃいい』ですって」

「これ見て この花見て、思ったこと、か」
しばらく眺めてたと思つたら、すつ、と大きな手が伸びてきた。枝をつまんで、そのまま わたしの頭に!?

「うん。これだな」

「な、なにしてるの、ウエスター! せつかく、かおるちゃんが って、ちよつと!?!」

車の中でウエスターがいきなりしゃがんだ。わたしが窓から覗き込んだら、ぱつ、と立ち上がって、「なあ、イース。これなんだけど、ちよつと食べてくれないか?」

「え?」

そう言つて、わたしの目の前に出されたものこれ、ドーナツのかげらがふたつ?

「ちよつとづつでいいから、さあ」
ま、まあ、そのくらい、いいけれど

とりあえずひとつづつ、つまんで口に入れて、何度か飲んで飲み込んで。その間、ウエスターがわたしをじっと見てるわ。なんだか、食べにくいわね。

「これが、どうかしたの？ それより、この花」

「ああ、砂糖の入れすぎかあ。俺、甘い好きだからなあ」

「って、なによ、それ!？」

「ウエスター?」

わたしが窓に近づいたら、彼がいきなり笑った。びっくりするくらい楽しそうに。

「右のほうをおいしそうに食べてただろ? だから、そっちが正しいんだ」

え? な、なに??

「俺はその花、イースの髪にびつたりだと思う。ってことはだ、兄弟はこう言いたかったんだよ。『味はイースにまかせろ』ってな」

なによそれ!

「ああ、さすが兄弟だ、本当によく似合う。美人だ

ぞ、イース」

「な、なに言ってるの、バカっ!!」

わたし、思わず後ろ向いて歩き出しちゃったわ。顔の赤さ、見られないように。でも

「無理しちゃって。疲れたためいき、聞こえちゃってるじゃない、もう」

かおるちゃんのマネするなら、もうちょっと自然にやりなさいよね。見習いさん!

ビンづめ梅をおみやげに

聖ルミエールの裏庭。生徒立ち入り禁止の庭で、テーブルといすを磨いてクロスをかけて、と。そろそろ、みんな集まるころかしら。

「一年ぶりだねえ」

「お久しぶり」

「まいど。来ましたよ」

ああ、来た来た。エプロンにカラフル三角巾のタコ焼きやさんに、よそ行き姿のパン屋さん、サングラスかけたドーナツ屋さん。

「みんな、元気でなによりね」

席をすすめるだけで、みんなくつろいでくれる。気の置けないのは、楽でいいわ。

「食べながらにする？ それとも、先に渡しちゃった方がいいかねえ？」

「頂いてからにしましょ。持ってきたんでしょ、か

おるちゃん」

「へいへい。オネーサマ方のご期待には沿そわないと

ね ほれ」

タコ焼き屋さん——あかねさんに言われて、ドーナツ屋さん——かおるちゃんが、中がくぼんだドーナツを四つ、お皿に乗せて出してきた。あら、今年ハート型のね。

さあ、それじゃ今度はあたしの出番。足元から出した大きなビンから、たづぶりすくってドーナツに入れて うん♡

「あはは、またジャムに負けちまったなあ。今年こそ、生地が勝つと思っただのに。ぐは」

一口食べたかおるちゃんが、笑って言うてるわ。勝ち負けなんて、考えてもいないくせに。

「ここだけですもんねえ、今の時期に梅ジャム作れるの」

パン屋さん——沙織さんがおいしそうに食べてるの、見ていても気持ちいいよねえ。作った甲斐があ

るつてもんだよ。

「まあ、食べ物時期ズレてもいいでしょ。子供達まで世間ズレしていると困っちゃうけどね」

「そこは、理事長の腕じゃない？」

みんなで笑いながら、ジャム入りドーナツ食べて。集まるだけで、気楽にすごせる。仲間ってのはいいもんだね、ほんと。

「はい、それじゃこれ。今年のおね」

大ビンのジャムを小ビンに移して蓋をして、あたしはみんなに配って回った。

「いつもすみません」

「あら？ かおる　　さんは、ふたつなの？」

「悪いね。つい最近、別の国にね、オレと同じドーナツ屋開いたヤツがいてさ。これ、すつこく勉強になるから」

「へえ。そんじゃ、いつもの子たちは？」

「まあ、ドーナツひとつづつで我慢してもらおっかな」

「大丈夫なの、くいしんぼぞろいなんですよ？」

「店開いたのは、その子たちの知り合いなんでね。説明すればわかってくれるでしょ」

「素直な子ねえ。かおる　　さんのと」

「　　パンパカのおネーサン。さつきから、オレの名前言うの詰まってる？」

「ああ、ごめんなさいね。娘の友達にも、かおる薫さんって子がいるもんだから、つい」

「女の子なの？ ああ、そりゃあ悪いなあ。こんなムサイのと一緒にしちゃさ」

「無愛想だけど、素直な子よ。あなたとは正反対ね」

「そりゃどうも。ひねくれてるからねえ、俺」

「なに言ってるの、サングラスかけないとおどけもできない子がさ」

「勘弁してくださいよ、タコのおネーサ　　つ痛くてっー！」

「『タコカフェ』！『タコ』で止めんなって、何度も言ってるでしょうが。まあ、あたしだけならいいけど、うちのひかりまでタコって言われちゃかなわないよ。素直にバカがつくぐらいなんだから」

「まあまあ、そのへんで。そうそう、うちでも一人、働いてくれるよ。あんまり素直になれない、いい子」

「あら？生徒さん？」

「いんや、バイトの男の子。うちは女子校なのに、まるつきり気にならないんだもんね。珍しい子だよ」

「へえ、やっぱ一年もたつと、みんな色々だね。それにしても、その子たち」

「『いちご』、会ってみたいもんだねえ」

—おしまい—